

「国立台湾大学サマースクールプログラム参加報告書」

京都大学経済学部2年 (原田 奈央子)

私はもともと中国語が得意ではなかった。授業は真面目に出席し、テスト前にはそれなりに勉強してはいたが、話せるようになるための勉強はしたことがなかった。そんな私が一か月台湾で過ごしたのだから、当初は苦勞の連続であった。勿論言語は分からないし、言いたいことはおろか、相手の言っていることもさっぱりだった。しかし、一か月経つ頃には一人で不自由なく買い物ができるようになり、公共交通機関でもアナウンスの内容が分かるようになっていた。ここに、私はこのプログラムの特異性もたらす効果を見る。

このプログラムには日本人だけではなく、中国本土から台湾の文化を学びに来ている中国人も参加していた。大学の様々なプログラムや課題のおかげで、台湾人・日本人・中国人の三者と深く関わることができるようになっており、中国語ネイティブに囲まれる状況が多かった。そのため、定められた授業外でも中国語を自然と学ぶことが出来たように思う。また、毎日のように Student advisor 達が寮の隣のラウンジと言われるところで勉強相談会を開催してくれ、分からない所はその日のうちにネイティブに解消出来るという素晴らしい環境であった。

このような国立台湾大学の素晴らしい待遇により、私の語学力は飛躍的に上昇した。しかし、それだけではない。彼らは同時に私の中の中国語に対する勉強意欲をも高めてくれた。中国語が分かるようになるにつれて、もっともっと分かるようになりたい、と思うようになったし、中国語を話す友人が増えるにつれて、もっと彼らと会話できるようになりたいと思うようになった。

また、これは語学面ではなく、文化面なのだが、台湾と中国の政治的、かつリアルな関係性を垣間見ることが出来た。恥ずかしながら、私はこのプログラムに参加するまで中国と台湾はあまり区別がないものと思ってきた。ひまわり運動についても全く関心を寄せていなかったと言っている。しかし、台湾に行くと、台湾人は台湾人というアイデンティティーをしっかりと持っており、中国とは一線を引いた態度でいることが分かった。彼らは中国に対して敵意は持っていないが、自分たちの自由を奪うかもしれない存在として認識していた。ひまわり運動についても、中国人がいるからといって曖昧に隠したりせず、堂々と自分の意見を表明していた。同時に中国人は日本人に対してこれから日中関係はどうあるべきか、ということ聞き、ためらわず自分の意見を言う、という場面にも出くわした。日本人はこういった問題に対してあえて考えないようにしている人が多いように思うが、彼らは真摯に複雑極まりない国際関係に向かい合っているのだと気付かされた。

最後に、一か月間海外で寮生活をしたことについても述べておきたい。もちろん初めは洗濯、食事、自炊、掃除などどれを取ってもやり方が分からず戸惑うばかりであった。しかし、寮では何より友達が出来やすく、同じプログラムに参加していない人とも友達になれるということが分かった。